

東都八大家戲文

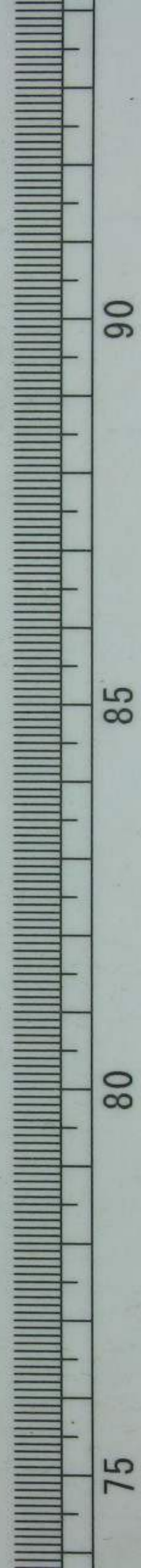
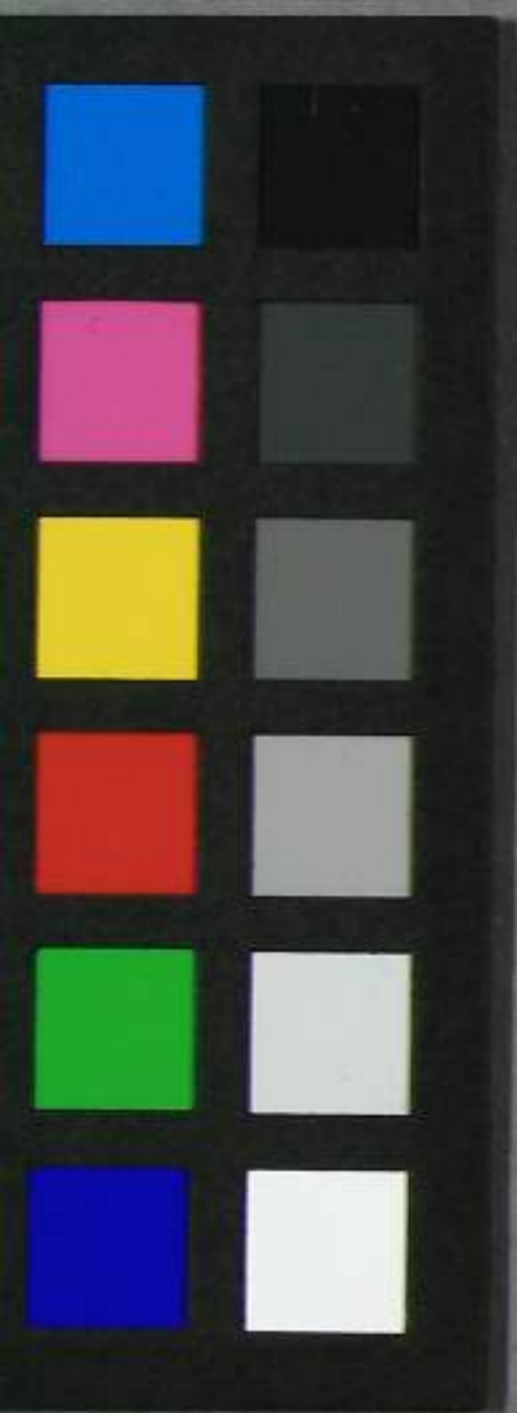
上編
坤

西垣文庫

文庫10

6737

2



東八大家戲文上編坤目錄

- 題古今百馬鹿卷首
- 去る申の歳菅原櫛といへる工出し世に行はれける特好人より狂歌を給ひしそれ返歌並み序
- 達摩齋贊
- 偽紫田舎源氏初編序
- 善患附込當座帳序
- 逢琴石序
- 腹筋逢琴石二編自序
- 腹筋逢琴石三編序
- 廓節要序
- 雜談紙唇籠序
- 火をいませむる詞
- 荒御靈新田神徳後序
- 娼妓絹籠序
- 千秋井の記
- 里のをだまさ評自序

式亭三馬
風來山人
蜀山人
柳亭種彦
十返舎一九
山東京傳
山東京傳
山東京傳
式亭三馬
十返舎一九
蜀山人
風來山人
山東京傳
蜀山人
風來山人



わけを糞と穢とを想は腑脱と玉の賞あるは如何抑べらば
 うと好観物から筆りのろまの可咲演劇より發る斯一
 お癡呆を擧て悉く馬鹿を盡さば所謂百の口些々不足歟空
 索子歟伸た鼻毛れかぞへも竭す結構人も律義も到頭は
 全じへげたれなり哥々の伯父れ上に立ん事難く腎六の脱
 作が下に立ん事難くなんありけるこ、に馬鹿れ馬字を名
 のりて三馬といへる癡漢あり自己が白たるをば棚へ放下
 して世人の暗穴を探ま目て古今百馬鹿といふ看官これを
 閱するとも人を馬鹿にしたといふとなるを素より承知れ
 文盲短才寔は華押のあが人眞侶三本足らぬ戯作者がかり
 口らしさを願はば吾ながら吁馬鹿らえうさんす云爾
 ○去る申の歳菅原櫛といへるを工出ま世に行とさける

晴好人より狂歌を給ひーその返歌並み序

風來山人

用ゐれは鼠の子も上尖竿をたばえ用ゐるをば虎皮揮も地
 獄の古着店に釣さるといつて昔の唐人の寝語眞實て呵
 らるゝより坐なりに譽らるゝが快は人情なれば虚言と追
 從輕薄を以はねば人當世をいらぬといふ抑此當世といふ
 もの今ばあり有にあらそ祝鮓が倭有て宋朝が美あらそん
 ば難乎今の世も免れんとあれば昔より有來の當世にしく
 八百藏が助六は柏筵が助六なれども人今更の襟に心得る
 も片腹いたま我も此當世をいらざるにはあらねども万人
 の盲より一人有眼の人を思ふて假にも追從輕薄をいはざ
 れば時よあそぬは持前なりされども人と生一冥加の爲國

恩を報せん事を思ふて心を盡せば世人稱きて師山といふ
 予戯て曰智恵ある者を譏には馬鹿といひたはけと呼あは
 うといひべら坊といへども智恵なき者智恵あるものを譏
 れ其詞を用るとあたはず只山師と譏る方外あし又
 造化れ理をしらんが爲産物よ心を盡せば人我を本草者と
 号む澤醫人の下細工人の様に心得已に賢るのむだ書ふ淨
 瑠璃や小説が當れば近松門左衛門自笑其積が類と心得火
 浣布ゑれさてるれ奇物を工めば竹田近江や藤助と十把一
 からげの思ひをなして變化龍の如き事をまらず我の只及
 ずながら日本れ益をなさん事を思ふのそ或は適大諸侯の
 爲謀りま事ども國家れ大益なきにしもあらざれとも狡
 兔死して良狗烹られ高鳥盡て良弓盡る細工貧乏人寶鳴呼

薄いあな我耳垂珠と悟を開き露命をつなぐ營に當時賤い
 色内職めて其糲をくらひ其錢をせまめんと思ひ付まを早
 くも卵雲木室君又尻尾を見出されたくり給える狂歌又
 酔て來く小間物見せのふて際と
 仕出の櫛もはやる筈なり
 實や巳をしらざる又屈きて巳を知るに伸とあんいへば此
 御答申さんどてわがま、八百を書ちらす固巳を知らざる
 人に見せるにはあらず嵐音八が曰ア、氣が違ふたさうな
 ろる時何と千里のこまものや
 伯樂もなし小つうひもなし
 ○達摩畫賛
 南天竺の菩提達摩はるくくと西より來りて梁れ武帝よま

みえー時民の膏血をしぼりて堂塔伽藍をつくるをみて無
功徳とこたへつひに少林のもとにかくれて面壁九年教外
別傳不立文字とていへど一切經の修行もこの門流の末に
なりくたがえつされめまぐふんさんもこの薬飯のかか
げよよりて大般若に轉讀も出來五七言の傳でも作るはま
だく此輩なるべいたづらに雪まるけの作りものとな
りく子共の杖に穴をあけられ疱瘡見舞の不倒翁か死やが
れ小法師とあまをばはらるゝも又白眼にたりならずや
○偽紫田舎源氏初編序
大江戸は真中日本橋に近き式部小路といふ所ふいと媚さ
たる女あり其名をた藤となんいへりける初元結のそれな
らで紫の鬚紐をつねにむとびけさの人人々にか藤とよば

柳亭種彦

ず浮名して紫式部とぞひける自もいつう是を聞知りさ
らば我名も因ある源氏物語に似たる雙紙を作らんと旦夕
心にかけられど書は草ざうしれ得かきよまず歌は二上り
三下り旋頭哥ならで字あまりよこのごとい何を知のみ
なまば紅筆をたえ囁ざりしがある人女にいひけるは河海
のふり丸湖月のひろきそれよと眼のたよばずとも要を摘
だる若草あり紅白雛鶴鬢鏡小鏡なんごを照し台ば微の意
を解す便とならんまじ十帖源氏よりよみたまひねとす
められ左言交の注文がき書房も得とく讀得がたく雛鶴
とは是ならんと所千代まで翁草ふれ間違れ三番叟若草と
は新内節十帖源氏は淨瑠璃本の物艸太郎と推量えて木に
竹本の葵の上後妻討れぢち混じ引書も略そろひければさ

て物語をりくり出んとそれとみろを案ずるに邊ちの近
 江店と名も縁ありながら大路をさしる車のたと米竹に
 うそのごぼくは夕顔れ宿めきて月を見るにたよりあり
 爰に幸空言にも當るといふにも因ある鉄砲洲に知音あり
 觀音菩薩はたとささめ人丸のやしろに詣り石屋に二階に
 假住してをりふ八月十五日月海ばらにうつるをながめ
 明石町に筆をとり延れ紙五十四帖蛭蚓書して目も鼻もわ
 らぬ艸紙をあらはしぬそもくむかしの紫式部は天台
 の深理を極め法華經の裏とやらんに六道流轉れ因縁を心
 あこめ書たりとく偽紫の今れ式部と性質の艶ものにて目
 もとでころして罪はゆくれご佛のまちにうとければ三觀
 四門一部八卷錢の相場と思たがへ心も賤く詞も賤く源氏

のすぐれていやまはと田舎といふ字に知られたりと貴賤
 上下をたまなべて笑ぬ入るそなありけき
 ○善惡附込當座帳
 寺に飼れる狐に鯉節を見すれば娑婆で見一與二郎やごに
 も思はず逃ある色飄宿の軒れ鶯自然と口笛の音を出すか
 ごとく所も馴て不顯見ると見ざるの違ひよて人の賞美
 するものなればとて明菘詠めて隅田川の花も塵になり
 てうるさく今一聲といたひぬる郭公も山の手の人はかま
 ましさとく耳ふさぐとやされば流行の仇討も鼻につき
 て珍しうらずとまは方の注文にまのせ慾深き濡手に抓
 む栗餅の躑をたとし焼直しては目覺まにた茶の口取びや
 ういのさ、めの見えぬ六冊物作者の知恵も一舛入る壺と

一舛かなじ事はひとば事太郎兵衛駕のさればな一浮世の
人の及ばぬ望み氣をいためるのこんなものといふと一
あり

○逢夢石序

山東京傳

夫明れ狂言作者笠翁傳奇は鸚鵡石を関るゝ古語は曰詩と
有聲の畫なり畫は無聲の詩なりどあや夫はちんぶん寒鴈
阿波坐鴉之浪華の身振敷鷺の京詞蟾蜍目ばちく雀のた
ちやゆびの赤貝唇服をだま木兎とだまりつぼう甲は蟹の
真似の子愚懃で金魚とひらつてば何かり落をとる蝸牛
が角をだそは巳が遊山なり蠅が棒をつかふは其身の苦海
なり蜘蛛に網をむすんで夜食のらせぎ鷺は泥鰌をふんで
腹をふやす妻こふ猫おこひあれば仇の野の犬は無常あり

色即是空それまゝに佛あれば衆生あり衆生あきば山猫も
あり柳の下の蝙蝠は山椒くきなるれいろく池は泥鰌と
ばんばヨウにいさるまでいさどしいけるもの豈介科口技
なうらんやと一陽齋をすゝめこと思ひつひたるのべ紙を
出しくう侍せる繪のむさみ椽れ下なる黒犬の身振とごふ
じやごでごんすどあいく見すればコリヤゑらひ受とつた
りや其次と是と面倒な作あれご案じがあらふと筆をとり
小首をかたふけ考れば板元と俟のねて智恵をのさふかち
ゑかその遅と酒を飲すぞよとせつくみぞちよつくりちよ
つと筆をかう持て眼鏡の月に目の霞字生も臆を作なれど
みいつゑゑらひコゑらひと板元大お乗がさてはひに梓
に鏑つけたり身振と則無聲は詩聲色は有聲の畫雨の降夜

は一玄ほに慰みおろさ此小冊をちよつどもこめてたくれ
でない

○腹筋逢巻石二編自序

山東京傳

役の行者の時代よといまだ足駄の齒入もなく筑摩祭れあ
りし頃は鍋の鑄懸もなるべし漸々に物毎功者にあり春
雨ははれ間を待てと古骨のいふとよびありき五月雨の軒
づたひよは視竹くくと賣來る蚊の嘴のみじか夜は萌黃の
蚊帳の聲すいしく籠馬の髭ながは夜は蠟燭のちがれりと
ふもいと淋し籠甲のをれ買は夫婦喧嘩の窓をれぞさ瀬戸
物の焼はきは疝癩持の門また、ずむ朧月夜の眼鏡賣時鳥
の曉傘ひやつこい水賣の聲には暑と忘れあけたい大福
餅ふは寒夜をふせぐなんでも三十八文字屋娘形氣の文錦

も昔の髪よ結鹿子万事に如才のなきなるに予が如き老鶯
は三日見ぬ間の櫻をまらず流行かくれは古夜着に寐覺を
わぶる二階住むかふの梁で天窓あぶない階子から作者れ
腹の晦日掃紙屑かはふととひ來ると文龜堂のあるじな
りこれ去年著せし逢巻石の後編を賣てくるとの望なれど
後咲と色もなく二番煎と香もうそいな船なごしや
くさくさなんので見たれども燕子花も懐よの文服紗にて
かちをととり茶売も南天のこやりにそれば珊瑚よひとしき
實をむすぶと手水鉢に目をつけて無間の鐘をつく氣にな
りひごい工面の小冊なれば其繪たるや百化鳥のおもむ死
に似てとんだ靈寶に髣髴たり其言種たるや鷺の首長いも
あれば矮雞の脚みじかいもあるは鳥屋れ椽のトる死あつ

めたる作なれば趣向の古椀古折敷案じとらすき襦袢裂襦袢
梳油は具売や髪のかちにてたもみをととり作れ屑籠取いだ
してもとより櫃玉にあらざれば價をまつべき貨物ならず
唯捨賣よりらめやノノ

○腹筋逢夢石三編序

山東京傳

つれもものまうくもふ聲あり昔の格子今れ塚ごすれと
いふも片となる下女がとりづく口上り高慢はいへば和國
橋上小船街第二坊は書肆文龜老店の主人俗よいへば和國
橋通小船町二丁目の木問屋伊賀屋勘右衛門お見舞まうす
と入來るかんれ用ぞとたづぬるに逢夢石の三編を書てく
れどれたのとなり聞てびつくり丸で三盃のんだ三度目と

其角もこまる扇の畫賛を書かから小首をのたふけ考るに
昔何某山人が根無草の後編又味贈盡一の序をのきたるは
其器量ありての事予がごときはそのきは汗を吸ことだに
あたはされば卑下盡しこそ相應あれごこれを趣向の種と
なし嬉しやさらばかゝんとて已に表紙を折返し硯をなら
す安机むりふにまめぐり白髪は紙撚の髪は髪渡玄髪が似
とて奴でござんすなら關羽や意休とみなな奴の髪宗祇さら
に時雨の世にふるは雪も竹松の胡麻搗髪梅とくふとも種
くふな中よござるが天神髪小林は朝比奈がいつもかはら
ぬ鎌髪や抹香くさみが閻魔は髪生臭のが笑壽の髪菱川が
昔繪は得ら髪うと髪虎の髪左右にわかる鬼髪や時平は大
臣は怒髪坊主小兵衛がつくり髪チツト髪撫とて高慢くさ

色例あり瓢瓜で鯨の髭をかさめるとくとりしよりなき
作なれば髭の鮎の美味もなく髭題目のはねりれどお兒様
方のおぼもりもチ、はづ渠芋も髭中間髭を墨にぬる此
老武者が戯作とはあつゝの獅子にみるひ髭ずいぶん卑下
よ髭を玄てあらま玄かくと髭盡髭くひそと玄てじやとい
ナア

○廊節要序

式亭三馬

朱子の節要の陳奮漢子曰を旨と玄て合類節用の唐偏僕令
の爲に作す爰に予が門人馬笑子が文庫よ廊節要は秘本あ
り其趣を関するに能く克子管して穴を採の早引也彼ど
是とを合符に大門ならぬ十三門に部を頒ば書三紋日に美
を飾る其品目を算るよふるとてらそい乾坤門彼の御見に

の有り無のが官位門文の封のりよふ神願ふ心は神祇門
すいた不好の人倫よ娼婆が嫌表徳の名字を腕に彫志支鉢
の指切髪切も表の實虚は裏約に初馴○の目印は是客帳
の數量門義理一遍の淺漬は算筒中は器財門春の夜櫻福壽
尊穂子の裡に樂まむは艸木の部類にして了髻が怕がる由
は氣形門に内にやあらん綿繡羅綺を七ツ屋へ曲るともキ
の字屋に下りを拂ふと所謂衣食門の苦も更よ怕くおざ
んせんごふするもんでおざりすと廊訛言の旨語門台て
十三書三買地色の字引客色は諸譯部分も眞艸は二道掛る
終季前たどへお茶を挽く新造なりども此書は實意を悟る
時はいつも夜廊を早引節用ひらがなつきの著述の妙言片
カナれ片隅に塊で才の有無を量よ余が底を借て彼よ長堂

を採られん事を狐オソレイスロトイウいふ

○火をいままむる詞 蜀山人

火は五行一にして民生一日もかくべからざるものなり

されどもその災をなすにいさりくはむひちあつづくべ

らす天火の罹さくへ一人火のつゝままずはあるべのらず

禍を轉しと福をなすその徳をおさむるにあり柳々洲が

王參元の失火を賀する文も小むづかしの七字の秘文

あり毎朝手あらひ口そゝぎ南にむかひく三遍となふへ

その文に曰く家内安火用心もめくうたがふ事なれ

○荒御靈新田神徳後序 風來山人

近松老翁世を戯場に避く數れ淨理を作けるに筑後播磨

の名人有く普く世上を行渡る勸善懲惡を教ふるの一助た

る事は近松氏の本心なり中頃千前文耕堂類も亦近松

氏の意をうけて作れる所正ければ此道甚盛なり玄が以つ

の頃よりか衰て今則れ作者之固それ所でとなく文法をし

らず手爾於葉を弁へず嘲を遠近に傳へ耻を千歳に殘を讀

ぬ同士書ぬ同士金響雷をこはがらず盲蛇物にかぢずされ

ども五年か三年一度犬も歩行ば棒逢ふ闇夜の鉄砲や

ぐを當りてくらんの藥のくらん病が買に來る遅牛も淀

早牛も淀そをも作者是も作者鴈が飛び見たがる石龜仲間

のじだんだ組すッべらばんの鼈作者泥水も足を踏込首を

すッふめ敬白

○娼妓絹籠序 山東京傳

煙花を將基れ局面に設け娼妓の駒下踏の往來を觀るよ茶

屋に客を待基子あり藤で私夫又問基子あり大通直うして
飛車先の如く素痴曲く角道に似たり初會の席上又初王手
あり馴深の闇中に入王あり色の金銀も有て思案になし堅
心の石田も崩れ楢に圍とも忽ち破る恐るべし巧計のため
に都通とあらんとを桂馬は誇て歩兵の餌となり香車の慮
りあきり謬身つ或と飛車手王手の義理に纏られ或の後王
手借金に苦し手のなき時は端れ歩をつくし苦よそる
茶屋の借臨期で二歩をゆひ留守をつかふといへども借
金乞の爲に逃道を失ひ遂に雪隠逼に成あり嫖客と將基を
圍は一手先と見えざるべし則ち娼妓絹麗を作る予がへば
象戯の及ばざる所と段將基の助言を乞而已
○千秋井の記
蜀山人

千秋井ははりぬき井石より水と金砂れ出ま事は平澤氏の
氣さんじに書ちらされしより平澤れひらたくあやまり入
て外にゆるべき穴もえさざされざながしてぬけめな
き車白園のもといいなまがたくこがねの砂の敷をひろめ
いむか一周の國の御家門魯國の殿の名家老をつとめし季
桓子とやらいふた人あり井をうがちて羊を得られしに
家老これをあやしそく千年むぐらのたぐひにやと孔子と
いふもれしりをよびてたづねられし時何やらむつあしき
事を引て木石の怪を鬼畜といひ山の怪をも、んぐはどい
ひ水の怪をのつばの尻とやらいふと答へたまひまとなん
もとより紅血鬪血の籠耳の事なれば筒井づの井づ、にの
けま丸でくわくわく覺は侍らず翁がむのしとけなあり

一時よなくさし物語の耳れそこへのこれるありむる
 舌きり雀のたぢうばうの物語に重き葛籠の中より
 はあやしきもの出かるる葛籠よりいよるづの寶出しと
 此たびはりたまへる井戸よりみのごろもてあそべる五
 冊物の化物は出ずしてめでた水とふがねの砂れ出しこ
 と舌きりすいめれつゝらのためしにならば心まめなる
 ひくひあるべえそ色正直は日天さまあけて淺艸のそばの
 名のこにあらずはひよ日月の憐をあらふるうべに神の
 宿札をうちまふびとなんされば堀ぬされ井のふかきめ
 ぐみありて若水はやき車井れめぐりよき幸來るべしとま
 うそ
 十〇里のをだまき評自序
 出風來山人

莊子が寓言紫式部が筆ずさそ司馬相如が子虚烏有弘法大
 師の兎角龜毛去りとてと久しい物なり予も亦彼虚言にな
 らひ氣れまれぬ麻布先生古遊花景の人物を設て訛八百を
 書ちらそ針を棒にひひなま火を以て水ととるそ我が持ま
 への滑稽にまて文の餘情の謔言なり或は所々の地名なん
 ごは人の耳馴たるに便りて直に其名を出せごも固作り物
 語なれば實又此事のあるよとあらず見る人怪べのらず
 ○奉加帳序 翁名燕斜又号豆三 蜀山人
 燕斜が別業又題せま日と囊中かのつうらまんとたりま
 が豆三暮四のいとなとも引込紫衣は隱居となりてと溢園
 扇をばうちすて、柿の衣は奉加せよとさる大檀那のそ、
 めにまかせ鬼の念佛は六津繪の万人講の催に心もいと

せりあらずな五行たびらこ佛の座臺座後光も煤びたるすい
ちそゞまろ箱ゝるの建立思へば春の一籠れ土一升も金一
升とつゝへ兵衛の冥加錢と御心持次第秋れ七草一葉ツ、
か志をまつそのちりもつもれば山く有がたく奉存い
以上

○燕斜翁をいためる詞

蜀山人

燕斜が別業に題すと戯れ！も三十年あまりまのはずれ池
のふるきむかしにてみよ菊の盃をくみく管を巻物くりの
へせしも七百とせとやそぎぬらんふとまむほさのはじめ
朝の雪のへり足にさかやまひをとさ彌生のほごり何
がの園のまどゐふかみ艸の花を此世れかざりど
まてさほさの末よ身まのりぬとさくにもむねつとふたが

りてとみよゆきとふらふ事あるとす年ごとの春のはじめ
よ手つゝら七艸を植ておくれる事なき思ひ出るよあ、艸
韓目わたる鳥のすみやゐなるがごとく「春ごとくに贈れるさ
みがやとけの坐へすやもとの五行たびらこ「せりなつな
つみもむくひもなき身よいさぞ後の世のそゝなすゝまろ
○膝栗毛發端

十返舎一九

鬼門關外莫道遠五十里是皇州と心へる山谷が詩に據て
東海道を五十三次と定めらるよしを聞けり予此街道に毫
をばせて膝栗毛の書を著す元來野飼の邪々馬といへごも
人喰馬も相口の版元太鼓をうつて賣弘めたる故祥に乘
人ありて編敷を累ね通去馬となり京大坂たよび藝州宮島
までの長丁場を歴て歸がけの駄賃に今年續五篇岐蘇路よ

いたぬ彌次郎兵衛喜多八れ稱異國に龍馬にひとまき千里
の外又藤たれば渠等が出所を問ふ人有依て今その起る所
を著去東都を鹿島立の角冊といたくれ走に曳出またる馬
れ耳に風もひのさぬ趣向のとめて置を柳からたるして如
斯

○偽紫田舎源氏第十編序

柳亭種彦

熱湯好湯番にへらく湯はあつくしてたくこそよけれ字
めれば何時でも温くある温湯好湯番にいへらく湯の温く
してたくこそよけれ沸せば何時でも熱くある是に似たり
し事のあり初めこれ日合源氏を作いでんとなまたる刻
老たる友人手に曰いにも源氏の條をくづさずなるべし
程の詞をも其儘用ひて書たまへ源氏を讀ざる童子のすこ

しの助となる事あらん若き友人手に曰源氏の條を案
て歌舞妓狂言浄瑠璃のおもむきに綴りたまへ源氏を讀ま
る者やはある予思ふに源氏の如く書と教へし老人は熱湯
好なり狂言歌舞妓れやうに綴りてすゝめ之人と温湯好な
り是にまごひて初編の艸稿いくたびの書あはしまつ若き
人の意見につぎ泥藏の物がたり人丸堂は無言場温く仕込
でたいたれど標題は源氏がさめて水にならうと巻々の詞
をそろく折くべて去年今年と沸えのけ既に十編に及び
しがこの湯れ加減未分らず赤本よはうのらぬ詞が多くて
熱て讀らくおぼさば仙鶴堂を叩たまへ次の編より狂言の
水をすめく温くせん板元は湯屋の亭主作者は湯番に異な
らずごうでもあうでも這入人がおやけさばよいまでよ

て一家の作と見識ぶつても戸棚ががらりと空てゐてハ眠
氣がさして居た、まれず十能で運ぶ消炭に當りつゝけに
したいたいが願ひされば御客様方ハ御意にのなふやうと井
戸ちあらねども彫をあらため竹の筧で坂の間の摺仕立を奇
麗よしと新米糠の袋入随分出精何かまつり明介体の札を
掛ず紙拂底に付直あげといふ場をこたえた代りに現金湯
ハ御承知のうへ御買われ可被下し
○痲疹與海鹿之辯
旅行を思はぬもれば名所圖會も面白くならず戯場を看ぬ
ものは俳優話説も耳にいらず和州順歴して自家へ回れば
舊地勝景を思ひ出して卒然に道中記が見ふくなり一回勾
欄を覗てと今まで嫌の優子説も自己ととる氣になるは彼

式亭三馬

申童嫌が傍倚らんせの愛敬もぐみやとなつたる一般に去
て見ぬ洛陽談話もとより感情ある味道をいらざる所以な
り細見を開けばまづ舊識唱の名を去れば痲疹がはやれ
ば俄に痲疹の書を見たく思ふに都て世間ハ人情なるべし
ちかさまで談義衣裝に定めたる正鉄色がはやり出そとそ
こらだらけが丁子茶だらけ流行物とはいひながら男の鬢
はまそく短く女ハ鬘は面より強大五歩真田の腰帶は男
子のしめるもれとなり酒の手中と婦人のかぶるものに死
まりて往古來今さきくも移り變るもまた浮世なりされ
ば御江都の消金場繁華の地方の新様物一ばん中何た物あ
れば贖れ出る事速なり時花東西には喬人が多くこの街
衛にも七種者漬のしるは十字街にも福徳煎餅灸たり灸た

り虚擬假物が正舗の本家が偽物ヲ汝が予の不佞が足下や
 吾ら勝に利を射る們の多き世にも流行て喬的の奇きもれ
 は這般の麻疹なり斷工と本來死く有た處が假てもつまら
 ず没法匙を放れば又拾ふものありて醫人の假侶する素
 人療治は包紙の表書も煎法如常と清朝風で嚇詐まて段
 正舗は賣契が魚市街の交盤冊りどよめぬやうににじくら
 ねば國手めかぬと心得るが白癩の初熱なりさるが中に
 も販藥生を似せる賣藥多く横町の玄まふたや新道のあや
 一れ出格子建牆に麻疹は妙藥と官標的は筆意を露は
 一筆ぶどに見えらせたる松江の間に合招牌井の牌を斜に
 睨らんで路次口にまでぶらさげ去は欲心表も出透なり其
 効驗の妙く奇く孰れを聴ても神は如玄嗚呼大いなる

うな麻疹の行くる、夫是を見て察せよかのれも頃日麻疹
 を患て漸く出透れけふとなれごうつ々く霖雨のはれ間
 もなけきばつせくなる死のかけよと節前は心機もな
 く子と病に勝れねど債主の分説にて恰好の病ありとひと
 りゆぶやきて居る扉をほとくとおとつる、は欠込んで
 来る女兒れあてもなし爰で水鶏も古いやつとど押たり
 くと寝て居ながらの應答も例の懶墮的なれば他もかの
 づのらゆるしたまへど入来る客の面を看るよ鹿子まだら
 れ銅墨だらけ顔色をべて正黒なるは牛兒に引れて善光精
 舎の自慢する信濃の國の人民大食冠の苗裔と聞えたる隣
 家の甚太とふ飯焚漢なり賓主の禮もへちまもかまはず
 づかくと入り来るにぞ又故郷の牘書をよませにや来る

下漢何事なるやと起身るに彼が曰ちと承りたき子細あれ
ば竈下を終や否即便參つたり先生に伺ふ事余の儀にあら
ず頃日世間に行はる、病名をハシカトハふもの七人あれ
ばアツカトハふ人三人ありいづれか是をやるやいづれが非
なりや同僚子弟れ爭論晝夜にやまらず負業を贖ふに大福餅
を以て芝二合半酒をもつてす其甚しきに至つては身價は
方銀三片これが爲ふ危し先生よるまゝ我が爲ふ教示した
まへと左右の跟を尻腰にのいし居さまの艸書の道の字
なまて編伴にまがふ綿布裕れ染摸様の色までもいと興さ
めて覺ゆるよぞ含笑半分正面に殺し冷た薬をぐつと吃恰
好の咳拂ひに勿鉢を切けて答く曰嗚呼其争や君子なる尤
あしくといふ病は別に一種ありといへども當時とやるハ

はしかななりと一うとあまかとは比ては奉書に炭團木履と炙
増龜兒と天道さま何ぞ遠ふなり早く賭の酒を吃めハツカ
くと苔ふるにぞしあらばはまか又疑なきと一うとまたる
証據を給へ先月の事なり一が東國方へ里醫の言ああ一か
くといふ事を吾慥と聞きみ、よ於て疑惑を生ずそれで
た飯を食ふ人すらあしかとハふと心得ず先生こそは奈何
と云ふイヤ、夫と餅耳あるべし假も神農の眞侶をこ
る生薬師の身分として病名しらぬものやとあるすべて東
奥の人言語鼻にのゝるがゆゑに五音律呂の開語わくるく
と一のもあしのと聞ふるなり國々の方言さま、て一
ツ二ツを爰にいはい、蛭蜂蜻蛉蟹螯と清濁わがらぬ言もあ
り江戸のら一夜又乗附る眼と鼻の間でもら、死窓の紐を

引張なくといふに引ばツさから引つ切たといふが
 ごとく國癖は事ハ夷曲おも大和の西さあぢかを關東べ
 以都ござんす伊勢たりやりますとよまれば浪速の蘆も
 勢陽の濱萩其國其所よりて言語もさま々變りあまご
 もアヒカハハヒカの僻耳お疑なまど辨ずれば甚太平面に
 微笑を含と有がたし先生のたかげにく銅壺を灰汁で
 磨た如く麻疹の生疑さりと解たりシテ又あまるといふ
 病別にあり根問の疑問せんかた案をトシとうち口から
 出まのせ方底圓蓋て曰夫熟ありりれ病症を監るお本艸綱
 目獸の部に海獺ウツウツといふとれあり大ささ犬のごく
 胸の下皮あり頭と馬の如く腰より以下蝙蝠に似たり其
 毛頼に似て大なるものなり其形圓と魚との生二役乞巧

演戲の定九郎當今のお笑種是日本の海鹿なるべし紀州海
 鹿島に多又群居て幾千となく砂上お眠る暗壁於宇くど
 響き軒息の音殊にすさよ心班中にお針れ老婆さんともお
 ぼしきもれ只一頭起番にくも玄漁船近づく時は寐ごかし
 された雛妓を鶴婆が起すに異ならず許多れ海鹿をゆり起
 して皆水中へ轉入といへり此もの人ま害する事數回なり
 として其以よりへ夢想國師といへる道徳いみじき聖のおは
 して一扁の眞言を唱へたまふ其文曰我佛不てろろ工
 色血エス弓平足花字平足花字平足花字平足花字平足花字
 傍へさまよりて大喝一聲耳つ遠耳つ遠と高らかに偈を授
 けたまひ又二首の哥をもつて化度またまふ其歌に「世の中
 に寐る得ぞ樂はな死ものをまらであらうがおきてはたら

く「朝寢坊宵寐をみれと晝寐までとさくたきて居ねふり
ぞとる此咏歌の奇特にやよりけん其後絶く障礙をなさず
どのや猶委しくは寐惚先生睡眠夢語に見えたり今も時と
しく此もれにたそとるもの箇の病となりて提燈を見る
時之頻に睡氣を催す路をりくる老夫老婦より寐るがた役
のうなる子までゴウノとうなりムニヤ」と苦しむ事
便病の業す處にして振新名代となつての客を看忽ち高軒
息を生じ小二夜食を食つては算盤を見て頓鼻呼吸荒
あるひは刺懸鶏に涙を垂らし或は竿を捻て舟を漕ぐの類
都て是アツカレ病症なり假令面上へのしこし山を寫き跟
へ大の艾を用ひく咒ふとも忽ち再發まで起て居て吟嘯を
吐き寐く居て小通をたれるに至る故に張景岳といふとも

邪ノ不家盧ノ録也

古山堂藏版

孫真人といふとも宿昔より方論ある事を聞かず誠なるかな
國醫さんでも神祇さんでもあし病と治りやせぬと守た
へる實に難治の症なる事金の艸鞋で尋るども外にさない
ぞやあまりの妙藥海懸といふ癩話説因縁此の通ぞと辨お
まうせて説付ればかまへの僻説御尤唯々として點頭去ぬ
○月雪花
花とさうりに月はくまを死をのみ見るもれおはとならび
が岡のすねものはへれさ花と立春より七十五日の三
五夜中れ糸月後の月もまためでたし雪は豊年の貢物とは
いへごつめさく跡くさらうりもうるさしと明阿彌陀佛の
ふみよもりけりげよふるとても若菜の價たのうならぬ得
ごこそ門田もる犬もよろこぶべけれ

蜀山人

○辰巳婦言序

式亭三馬

色好ざらんといへる日本の放蕩家傾國とそ、のかす漢士の
 の狂費家貴妃が淫婦無羞女が醜女薄情愚意心實も悉皆皮
 一枚の戯ならずや蓋義理一遍の通情は結句心れもめる種
 割て見せさき女郎れ膠呑込姿の江戸子の根生骨を酔道れ
 眞水に晒して一寸南鏡一篇れ書を著玄金の鯨管版打たる
 諸君子の覽に呈す元來戯誰れ書と雖も聊悟道の捷徑なら
 んハテ足下人間一生魯生が夢樂一み僅二十年ナッレから
 ろい内と云爾
 ○矢口荒御靈新田神徳口土代作
 軍は勢の多少よらさ芝居は水物と昔のら負をしよ
 能や事なれども終ぞ是まで半がらて足ついでためしもな

ければ止るに相談台はまりーを去方様れは異見ふ去どは
 か江戸の廣いとをえらなみの二丁町を聲色をゆかふと通
 り吉野丸でさわげばにたりても認ふ主水の表で駄菓子
 賣越後屋れ門を切賣が通る晝三のら夜鷹まで夫だ應に賣
 るといふがお江戸の廣い證據なり裸で物は落さず女角力
 を罌丸をつめたさめいなまと闇雲にす、められ運は天よ
 めりばた餅は棚にあり下りは隣あり此方に之何にもな
 けれども其代金の出一人もなければ請子をしてくる様を
 心持にてとたい所が元直なり入らぬ所が平氣とやもや
 つとりへらず口屋ねの破た一徳に寝ながら月を見るとい
 ふて味噌を上る理屈にてろくな事ではなけれども只は見
 物様れはひいさを下りの太夫三弦とも守り神とも金主と

も是斗り頼にて心一盃に思ひ付福内鬼外先生は新淨るり
 を出せども衣装もなけよば道具もなま江戸のた氣ではた
 目まだる一大山は參詣の道すがら旅芝居を見るが心よて
 悪い所が面白い不出來な所もこゝつはよいくと委細構
 はずた譽あされて見物の程奉希上い

風祭山人

○流餅酒論 清水餅口上書第二番
 私餅店の義町中下戸様方は最負取立を以段々繁昌仕
 ありがたく奉存候然る處此あひだ底貫氣右衛門様とや生
 醉様は出なされ巻舌にて注意被成まそるはヤイ亭主清水
 といへば水又縁ある酒をこそ賣べけれ何ぞや野夫な餅店
 を出下戸めらわらせ錢をせしめんとの謀言語道
 斷の次第あり汝が口上書を見るに皆身勝手のせりふなり

汝が口上書を見るに皆餅はど穢らひし物となし先痰持
 の胸を苦しめ疝氣持と色ん玉にもてあけかひ女郎の未の
 癩持となりうげまの果ては痔持とある子持は女は色氣を
 さままやちにはあをそを侍るす不器量のあくたいを棚
 うの落した牡丹もちとひ蒲團ばありで獨寐をのしわ持
 と異名せりとりもち殺生戒を破りむぐらもち植木を
 そみなふ秩父にたはさ色持あり四國に犬神持あり賤死事
 を荷持歩行持と云無首尾な事を手もち無沙汰といふ身持
 氣質は附合をえらず節喰は相手がいやがる鎗持は鎗を遣
 はず金持は金をのりぬず辨當持先へ喰ずる不持の餅
 ゆゑに下戸の建たる藏となし早く相止め然るべしと青筋
 はゆてぞやける

○巢がものさく

蜀山人

月台の月行事つきぎやうじの菊きくは黄花くわうくわありとてふた茶碗ちやわんの菊味きくみを味あじひ
五斗米ごとうまいのすて扶持たすけをいやがる五柳先生ごりゆうせんせいは色いろくをまが死しの
もとにとりて白丁はくてうの徳利とくりは来るをまつ又またはどけくさい遣れ
花けずきの濂溪殿せんげいは菊きくと澁谷しぶやの隠居いんきよとやら隠遁いんどんとやらは
色いろ一ひとがちか比巢ひす鳴なの五軒ごけん町ちやう七軒しちけん町ちやうもいほまか五十軒ごじゅうけん七十軒しちじゅうけん
となりて駒込こまご染井せんゐのさくまでひゃくしやうやも百種ひゃくしゆのゆくり物もの千状せんじやうのば
け物もの所ところせく東籬とうりも花壇くわだんも百姓屋ひやくしやうやも汚酒たんさけさかな即席料理そくせきりやうり十
王おうの勸進くわんじんもくはふがため十念じふねんは和尚わしやうさまゆくはぬがさめ
も又またありがたし

○戲場あそび粹言すいげん幕まくれ外序そと

式亭三馬

海風蟹うまかを笑わらて曰いはく行くか歸かへるの歸かへるが行くか蟹海風あまざけりを嘲あざけり

て曰いはく尻しりが首くびう頭あたまが尻しりの云々うんうん近來このころ滑稽けつげ本ほん廢すたけて泣な本ほんとな
り青本あおほん變へんじて赤本あかほんに歸かへる滑稽けつげ本ほん書あを本ほんは眼めより泣な本ほん赤本あかほんを
指さして野暮やぼと笑わらひ不洒落ふしやれと嘲あざけりる時は亦また泣な本ほん赤本あかほんの目めより
も行過あきと嘲あざけりり假在行かざいかうと笑わらふべし善惡ぜんあく正是まことにこれ入我いれが我入がれが滑稽地けつげち
に落おちて戲作者あそびしや棚たなへ上あられ空くわ々くわく口くちを閉つんで後あとる、流行りやうを嘆なげ
ずるのみ傍かたはらに貸本屋かきほんやありて曰いはく頃日このころ専らせんら悪あくキヤリ本行ほんかうの
れて世よに盛さかなりしうも切落きりおちへ落おちて克よく反元はんげんは米櫃こめびつを潤うるす
利りを射やる本屋ほんやが欲心よくしん満まん々く意氣いきでも慷慨かうがいでも何なんでも角かくでも
えりごつて十九文じゅうくわんより下直げちきに扱あつかひ野暮やぼでも賣うれるを貴たつとむ
事宜しやぎなる哉いか文ぶんを鏝あるに俗語しやくごを切抜手きりぬきて爾葉にらばもしらぬ諱こひ寢あ呆どろ
の樂屋がくやで聲こゑを啞おすのさよして見物けんぶつの耳みみに遠とほし漢かんは倭やまとの古こ
事來歴じらいれきあのもれ、さ書かく問いあらば鼻はなの先さきよぶらほいさ

芝居見物の情を穿ち有の儘にかめにかげく賣れるが勝を
 發明し給へ盲目三人目明千人泣が不洒落の賣色ぬが滑稽
 のど本屋よ一番張込れてこいつ大又誤持たりと蟹と海鼠
 比理論を悟り尻が首の歸るの行くか跡先もなき趣向を探
 て本屋の口又糊すれば夫で作者のた役は濟む噫嘻さうぢ
 やなど筆を採戯場粹言幕の外と題を洒落か不滑稽か一夜
 漬思ひ付て例の如く早拵の分解序の名代にまういふ

○酒色財

蜀山人

一休は兒を若俗とよびある人役者を男傾城と名づけて老
 年の樂とせりむべも日月江海のでんぼうに風雷鼓浪のま
 やざりとて天地一大戲場れに乾隆の座元の名言なるべ
 ！又あり引れ炬燵又伽羅をくもらせ太夫とふたりかもね

んどと油煙齊言因のうたにまて小傾城もさておぶらんと
 は晋子が師走の井口比よりとせを引たる内證の遊びなら
 んとべて劇場青樓の樂は老少となく雅俗となく此上やあ
 るべきされど難波の西鶴が野郎翫びとちりある花の前
 又狼のねてゐるごとく傾城又なむと入かゝる月れ前に
 燈灯のない心ぞありと好色一代男に書しもことばりなり
 さて又儀狄とやらんがとじめてつくれる狂水さいふもの
 みそおかしきものなれ上戸はかゝるまゝく罪もあるさるもの
 なりと雙が瓶の色法師もいひ盃のそりなり亂酒は無
 用と親父ものたまふ五戒の中でも遮戒とやらとすあしこ
 とぼの濁りまよりその樽をくらひそれまをそゝるもれ
 そくなのらずされど此酒色のふたは財と云ふものなく

てはその樂を得がたし思ふ事ふつけれたる其あとと花
のみやこも田舎なりと芭蕉の翁もやさき三不惑と口を
いな唐人は寐言も心もとあまそれ財を生ずるに大道あ
り食ひものは小勢でくひ仕事と大勢でせよこれを用るも
の舒なる時と財つねに不足なしと大學もみえ民生と勤
るにありかせぐと追ひつく貧乏なしと左傳よのせしもこ
こらあたりなるべしねがわくと金の番人守銭奴とならで
酒色のふたつもはざよく樂まば五十年も百年にむるひ百
年も千代よるづ代の心地なるべし

○さよとつ餅口上代序

世上の下戸椽がたへや上しそも我朝の風俗にて目出さく
事よもちひの鏡子もち金もち屋敷もち道具に長持魚に石

もち廓は座もち牽頭もち家持ハ歌も名高く惟茂武勇あく
れちのるめでたき餅ゆゑに此度おもひ持きたての器
物もさつぱり清水餅味ハ勿論よいと最負ハ評判れ
は取もちにて私身代もち直まよるしき氣もち心もち嗅も
やたもち打忘れ尻もちついて嬉しがるやう重箱れそみり
ら隅まで木に餅のなる傍評判奉願以上

○傾城水滸傳二編序

曲亭馬琴

八百屋の賣物八百色に限らず學者の十千屋され物多し大
を語らんと欲すれば駱駝山鴉もとふりまたり小を譚らん
と欲すれば漁獵角瓶れ下段も、のゝは柔さを好る人に
さ笹之雪も數ならず堅いものを悦ぶ客には棒香の喉も
まだ足らず神事舞のまゐると雲雀獨樂より速く藤八五文

の走ると機關泉も終に及ばずされば去年は流行より今茲
れ不易よますとあらじと是より先に著せし傾城水滸の初
編れ評判よし野と聞ば櫻木に銷られし甲斐もありしから
ば后をと繼三絃れ三すぢ四條の燈心もろとも氣根をへら
す夜並仕事もくせの憑たるづるけの本店運は承知である
けれど鶴屋が頭を長くまて松に壽く千代萬代春れ仕入に
間を合したるだらゝ急々如律令涉覽れ通り女才なく序
そ

○嫩案葉相生源氏後作

風來山人

古語に曰寸も長さことあり尺も短きとありとされば木綿
を買者之價少ふまて其丈長まといへごも長しとせず錦を
買ふものは價多まて其丈短しといへごもまぢかまとせず

予が戯に作れる嫩案葉相生源氏九段續なるを東都れ芝居
の習なれば未れ三幕をのこま置評判まだいに稽追々に
出さんど先六段目書で取組けるに當正月二日より如月下
旬れ今に至るまで引續くの大小段敷切落のいふもさらな
り二の手をのけて見物雲れ如く集り舞臺の後人の山を築
く入るよあまへ勝又乗く末三段は趣向のみにていまだ筆
をさへ探らずまかるを淨瑠璃をこのむ人々まきりに正本
を望むと本屋が錢をほしがるにうがやうよ止とを得
ず物足らぬ正本を出しぬ手紙本綿の地太にまてまのも丈
の足らざるをかもひきの目には蜀紅の錦ども見違く跡の
出るを待たまへる

○平荷集序

蜀山人

胸中に萬卷の書なく眼中に天下の奇山水なければいまだ
必しも文をよくせすたとひよくするとも女わらべれふと
ばなりとはもろこ玄元朝の吳立夫がことばなりけり朋賦
堂平澤天壽平格子薙髪して平荷翁とよぶ胸中も萬卷は稗
官小説をたくはへ眼中に天下の人情世態を盡し上のやん
ごとなき王侯大人より下とあやしの倡優隸卒にいたるま
でことくくみてつやびらかに語じたれば心も思ふ所筆
にのらずと以ふ事なく筆の動く所こゝろのごとくならず
といふことありしべなるうな俳諧に月成の號高く戯作に
喜三二れ名をつたへ狂歌に手柄岡持ありて詩をける釣針
にひとまゝ狂詩も韓長齡と稱して平仄の燭を刻すべま狂
文にいたりて一流は文法にして人の氣のつらぬ所をう

がち人の意表は出る事を樂む思へばむり一鄭の國の滂留
守居東里れ子産といふ人ありてその國の辭命を潤色そと
きこえしもうゝる筆にやありけんうしことしその子大奇
ぬ一父れか死のこせるくさくをあつめて一集と一醫友
國乘燕斜の二子にことづて予が序をもとむる事まきりあ
りわれ朝夕のいとまなくて一日くくとそぐせしうちに燕
斜も巢を辭してどこよの國にいりぬればわが身さへ心も
どなくとく筆とりて同じ心の圓乗れもとにわたりぬ平荷
翁またまあらば破顔微笑またまへ餘人のまゐる所にあらじ
の

○荒渺靈新田神徳口上後日代作
先達て奉や上い通二文四文のこま芝居誠に海老雜魚の

風來山人

魚まぢり一寸法師の背くらべさりとしてあけのまゝいね
りま大根で太いの根と来ふ方八芝居と叱も可被下所判
官最負曾我最負弱い者を見捨ぬは實頼母まきか江戸は汚
氣象有がたぬれてつへんよて屋根の穴あら雨の漏をも
いとひなくは被下い最負汚憐愍を笠に戴きごうやら
あうやら芝居の様な物に成掛り偏よは陰汚取立故と難有
仕合に奉存い何をがな汚禮は慰に相成い様にと心いやた
けにはやきごもない袖は振られず瓢箪から駒も出ねば金
主から金も出ず提灯で餅つく様に氣ばかりあせつて埒明
ず鉢ふんばり身代りぢりゑいやはとの思ひ付にて来る廿
七日より七ツ目の泥仕合八ツ目九ツ目大切迄追々出奉
入は覽いへごも是以道具衣装そふらだらけが不都合だら

けは目まだるきと勿論なれごも悪ふても能負ても勝じや
どは町中様は最負のは蔭を以て此度の四幕目遊園扇の氏
子をはなれリンくリンよ引かへてゑいとらくどは見
物幾重にも奉願上い

東都八大家戯文上編坤 終

明治十六年一月九日御届
同 年二月十日出版

(定價三拾五錢)

原 版 人

廣島縣士族

岩

崎 好 正

東京神田區雉子町三十
二番地

翻 刻 人

山梨縣平民

石

川

中巨摩郡五明村三百八
十七番地

東京日本橋區通二丁目

稻 田 佐 兵 衛

發 同 芝 區 三 島 町

山 中 市 兵 衛

兌 同 神 田 區 雉 子 町

巖 々 堂

書 大 坂 北 久 太 郎 町

柳 原 喜 兵 衛

肆 同 備 後 町 四 丁 目

此 村 彦 助

西 京 三 條 通 寺 町

福 井 源 次 郎

早稲田大学図書館

011688985678